

巻頭言

10年を振り返って：
「言葉と研究と教育と」

小林 一郎
(お茶の水女子大学)



「人工知能学会誌」Vol. 23, No. 3 (2008年5月発行)の「世界のAI,日本のAI」というシリーズ特集の第11回目に「言葉と教育と研究と」という題目で寄稿してからちょうど10年になる。その特集の目的は、在外研究をしている研究者などに海外での研究活動や環境を日本のそれらと比較して紹介するというものである。筆者が滞在したドイツ人工知能研究センター、スタンフォード大学など海外の事情と比べて10年前に書いた日本の状況は、およそ次のものであった。

(1) 言葉の壁による情報発信の少なさ

日本の研究室のHPのトップページが英語のページになっていないものが多く、日本の研究活動が海外に伝わりにくくなっている。

(2) 国内の多忙な学会活動による研究時間の不足

欧米では多くの国が英語を使用言語として会議を開催することから、国内会議あるいは国内での学会活動という認識がなく、もちろん国内のみに限定した学会活動はほぼないに等しい。そのため、海外に向けての情報発信がない国内の学会活動で疲弊することにより研究時間を損失していない。

(3) 大学教育と企業での活動の連携のなさ

筆者が在外研究で滞在したスタンフォード大学では、多くの学生がシリコンバレーの企業に就職していたが、その際、大学で学んだ専門性を生かした人材起用がなされている。一方で、日本の企業は大学で学んだ専門性を踏まえた人材の起用は少なく、学生が習得した専門的知識を顧みず、入社後の社内教育活動で新たな仕事に就かせることが多い。

10年経った現在、事情はどのように変わったのか、大学の一研究者・教育者の立場から私見を述べてみたいと思う。日本人研究者が国内の学会活動に忙しくしていることは今も同じであり、以前とは大きく変わっていないと感じる。この点においては、日本での研究活動を促進するという意味では必要な活動ではあると思うが、日本国内にしか影響を与えない活動で閉じるのではなく、もっと海外に日本の研究をアピールするような活動が増えたほうがよいと思う。研究者は、今に増して研究をする時間をもつようにし、日本から発信する研究のプレゼンスを高めることを心掛けるのがよいと思う。

大学と企業との関係については、10年前はまだ日本経済が停滞しており、学生達の就職活動が過熱を増して、修士の学生でも1年の秋からそわそわしだし、落ち着いて研究することができていなかった。また、必ずしも大学で学んだ専門性を生かした仕事に就くということは多くなかったと思う。一方、現在は、昨今の人工知能ブームによって、人工知能や自然言語処理など知能情報処理系の技術者が不足しており、企業の方から大学で専門を学んだ学生をほしいという声が多くなっている。このことは、大学で習得した専門性を企業に入った後も活かせるという意味では理由はともあれ自然な連携がでてきたのではないかと思う。現在は多くの企業がインターンシップ制度を採用しているが、もし、学生への研究・教育に対してより大学との連携があるような制度として運用されるのなら、さらに一層良い連携が実現できるのではないかと考える。

言葉の問題は、もちろんいまだに大きな障壁となって憚っているが、ここ最近、筆者が学生を指導してきて感じることは、10年の間で若い世代の語学力はかなり伸びているということである。国際会議などでも立派な発表をしている日本人学生も多く、時代の背景から語学力の必要性を若い世代はしっかりと感じ、能力を伸ばしていると感じられる。

日本は、人工知能研究において世界から周回遅れと評されている。海外の事情とは異なり、日本では博士の学位取得後に安定したポジションに就くことが困難な現状がある。そのため、あえて博士課程に進学するよりも修士取得後に企業で働くケースが多い。日本が周回遅れの現状から脱却するためには、海外の企業に太刀打ちができない応用の研究ではなく、理論的な研究をより強化することが必要であると筆者は感じている。それを実現するためには、もっと研究者を増やすべく、日本の教育や研究に対する環境改善をする構造的な改革が必要と思う。筆者自身、できることからの取組みとして、10年前の気持ちと同じく、一研究者・教育者として後進の育成に力を注ぎ、国際的な活動を視野に深い専門性を身につける教育を実践し、日本から発信するおもしろい研究を目指して勇往邁進したい。